様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２２　年　５　月　２５　日現在

研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：　２００６　～　２００９
課題番号：18320027
研究課題名（和文）　「奉為の造像」研究

研究課題名（英文）　RESEARCH ON ”ONTAME NO ZOZO”(BUDDHIST STATUES MADE FOR A MEMORIAL SERVICE)

研究代表者
長岡　龍作（NAGAOKA RYUSAKU）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：70189108

研究成果の概要（和文）：東アジアに広く見られる、物故者の為の造像を「奉為の造像」と位置づけ、四年間の研究期間の間に特に中国の事例を調査した。その上で、日本作例との比較をおこない、そこに込められた造像動機と仏像表現の関係を考察した。これらの成果に基づく三篇の論文を収載した研究成果報告書を刊行し、中国、韓半島、日本における「奉為の造像」の造像原理と具体的な事例を示した。

研究成果の概要（英文）：We conducted research focus on Buddhist statues that were made for a memorial service, that is “ONTAME NO ZOZO” in Japanese. This kind of motivation for making statues is based on not only Buddhism but also Confucianism in eastern Asia. We surveyed such works mainly in China, compared their expression with Japanese, and published the research journal includes three essays.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	3,100,000	930,000	4,030,000
２００７年度	2,300,000	690,000	2,990,000
２００８年度	2,300,000	690,000	2,990,000
２００９年度	2,700,000	810,000	3,510,000
年度			
総　計	10,400,000	3,120,000	13,520,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学
キーワード：美術史

１．研究開始当初の背景

従来の美術史の主な関心は、美術作品の帰属とその様式であったが、近年は、美術をその背後にある文脈とともに考究する方法が自覚されるようになった。その方法からおこなわれる、近年の研究の主流は、文脈を社会的・政治的なものとして把握することにある。一方、研究代表者は、基盤研究（Ｃ）「仏像荘厳にあらわれる墓モチーフに関する調査研究」(2002～2004 年度、研究経費 3,400 千円）を遂行し、仏教と墓葬美術との関係を問う観点から研究を進めた。同研究により、仏教美術を仏教以外の思想との習合を背景に考えるべきことを自覚し、本研究は

その延長上に計画された。美術を考える文脈をより思想的、宗教的なものとするために、２．に詳述するとおり「奉為の造像」という切り口から研究を進めることとした。「奉為の造像」は、仏像というものの孕む本質的な一面を捉える見方と考えられるが、美術史において造像を支える理念としてこれを措定し、その表現及び機能を考察した研究は、研究開始当初にはなかった。

２．研究の目的

古代日本の造像のうち、法隆寺釈迦三尊像を始めとする７世紀の在銘像はいずれも、物故者のための近親者による造像である。これらの像の銘文は、場合によっては著しく簡略なものではあるが、基本的な内容は中国南北朝期の造像銘と共通している。また、像とともに銘文を刻むという作法も、現存する北朝の造像碑などと共通したものとみることができる。

これらの銘文の多くにおいて「奉為～」と記される対象は、親子、夫婦、主従、師弟といった造像者と一定の関係をもつ物故者である。そして、その関係の中において物故者のためにおこなわれた造像は、「孝」や「忠」という儒教的な倫理を背景として評価される。したがって、「奉為～」という動機は、六朝期に儒教との習合を果たした中国仏教に由来する、共通した制度に基づくことが想定される。

また、造像銘は一般に、台座や光背という像を見る人間に見やすい位置に書かれる。ここから、造像銘には造像者と物故者の関係を明示する意味があると考えられる。これは、中国の墓制における墓碑の機能に類似している。つまり造像銘とは、造像行為の意味を対外的に示す機能があると理解できる。韓半島の作例を日中の間に置けば、このような造像は東アジア全体において見られるものである。

本研究は、東アジアの造像におけるこのような共通性に注目し、造像行為を支える思想的枠組みを解明することを目指して始められた。そのため、本研究では、この理念による仏教造像を「奉為の造像」と位置づけ、それが日本においてどのような造像に結実したのかを考察することを目的とした。

３．研究の方法

本研究は東アジアに拡がる「奉為の造像」を考えるために、(1)日本における造像と、(2)その比較対象となる中国及び朝鮮半島の造像を研究対象とした。以下にその内訳を示す。

(1)日本における造像

①飛鳥―奈良時代の追善造像

上代日本において確認できる「奉為の造像」をとりあげる。第一には飛鳥時代の「知識」造像に着目し、中韓の在銘像と比較しつつ、造像組織・造像目的・表現の相関を跡づける。第二には、天平期に特に光明皇后によっておこなわれた追善造像を対象に、そこに中国において成立した儒仏の習合を背景としたモチーフが移植されていることを明らかにするとともに、天平期の造像の基底に「孝」が強く意識されていたことを考証する。

②平安時代前期の追善造像

九世紀前半の承和期以降、中央の貴顕が主体者となった造像が活発化する。そこには、観心寺如意輪観音像、広隆寺講堂阿弥陀如来像、安祥寺五智如来像、仁和寺阿弥陀三尊像、棲霞寺阿弥陀三尊像など当該期の乾漆併用像の代表的遺例が含まれる。従来これらの造像は真言系彫像として括られ、密教的背景から解釈されることが多かったが、これらは明らかに「奉為の造像」として位置づけられるべき事例である。飛鳥時代の造像例とは違い、これらの造像には銘文が伴わない。しかしながら、資財帳などにはその造像主の名が明示されている。このことは、像を記録するに際して最も重要視された情報が造像主だったことを示している。これらが「奉為の造像」として位置づけられる理由はここにある。さて、これらの造像は何らかの枠組みに則って為されたと見られるが、そこにはいくつかの方向性が看取される。天平造像の復古、陀羅尼の功徳への期待、唐制への準拠として想定されるそのような枠組みについて、より詳しく検証をおこない、「奉為の造像」がこの時代、どのような制度の中で実現したのかを明らかにする。

(2)中国及び朝鮮半島の造像

①中国北朝期の邑義造像

雲岡石窟第１１窟の太和７年（483）の銘文に初めて現れ、河南省の北朝期の造像碑に頻出する宗教組織「邑義」による造像は、地縁を紐帯とした結社がおこなう「奉為の造像」である。本項ではこれらを対象とし、銘文の読解をおこないながら、組織の実態・造像目的・モチーフの意味について分析を加える。この作業は、「奉為の造像」の基本的な構造を明らかにするとともに、日本の「知識」造像をも展望する材料となる。

② 中国隋唐期の舎利荘厳

隋文帝による仁寿舎利塔の起塔は、その石函に釈迦の死を悼むモチーフが描かれていることから、釈迦の埋葬として位置づけられていたことがわかる。また、則天武后による大雲寺では舎利容器が棺型へと変化したことが知られる。これらのことは、舎利を丁重に埋納するという行為が、墓葬に擬された「奉為の」行為となったことを示している。舎利荘厳は仏教荘厳と墓制とが交渉する具体的現場として捉えられるのである。本項では隋唐期の舎利容器を調査分析することを通して、儒教に由来する墓制が仏教荘厳とどのように関わっているかを跡づける。

③統一新羅時代の追善造像

統一新羅時代の在銘石像（癸酉銘全氏阿弥陀仏三尊像〈673 年、国立中央博物館〉、癸酉銘三尊石仏碑像〈673 年、国立公州博物館〉、戊寅銘石仏像〈678 年、蓮花寺〉など）は、中国の造像碑の形式を継承しつつ、その銘文中に造像主体として「知識」を登場させる点で日中の中間に位置づけられる「奉為の造像」である。また、防禦山薬師三尊像は、地方官吏が王のためにおこなった九世紀新羅の磨崖仏形式の「奉為の造像」である。このような造像例を素材に、統一新羅の「奉為の造像」制度を定位する。

４．研究成果

2006 年度

（１）海外調査

2006 年 9 月に二週間、中国陝西省・河南省において、以下の調査地を調査した。

〔陝西省〕碑林博物館、陝西省歴史博物館、陝西考古研究所、青龍寺（以上西安市）、慶山寺（西安市臨潼区）、法門寺（扶鳳県）、慈善寺石窟、九成宮遺跡（麟遊県）、彬県大仏寺（彬県）、葯王山石窟、耀県博物館、神徳寺遺址（以上耀県）。〔河南省〕龍門石窟、古墓博物館（以上洛陽市）、河南省博物院（鄭州）、相国寺、鉄塔（開封）。この調査において、本研究のテーマに沿う、以下の二項目において成果を得た。

①中国の邑義造像・石窟造像

西安碑林博物館、葯王山碑林、河南省博物院においては、展示中の多く造像碑を調査し、「奉為」目的で造像された作例の祈願内容と主題・表現について多くの資料を得た。

② 中国隋唐期の舎利荘厳

隋文帝仁寿舎利塔の重要遺例である、耀県神徳寺塔については、耀県博物館において出土遺物を調査し、また寺址を踏査した。特に神徳寺址の立地を確認できたことは、仁寿舎利塔が景観と有意な関係を持っていることを確認できた点できわめて有益だった。

麟游県では、慈善寺石窟、九成宮といういずれも文帝と仁寿舎利塔に深く関わる遺跡を調査し、この事業の起点としての意味を再考した。

法門寺と慶山寺では、唐代舎利荘厳の最重要な遺例二件について詳細な調査をおこなった。特に、慶山寺では、地宮そのものの構造に重要な意味があることを見出し、きわめて有益な資料を得た。

（２）日本国内の調査

畿内と九州を中心として、平安時代の寺院と仏像に対する調査をおこなった。造像の動機として「奉為」観念が重要な意味を持っていることを再確認した。

2007 年度

（１）海外調査

2007 年 9 月に十日間、中国山西省・河北省・山東省において、以下の調査地を調査した。

〔山西省〕山西省博物院、五台山（顕通寺・菩薩頂・塔院寺）。〔河北省〕曲陽・北嶽廟・修徳寺址、定州（定州市博物館・開元寺塔・浄衆院・静志寺地宮）、正定（天寧寺木塔、龍興寺、龍蔵寺址、開元寺塔）。〔山東省〕博興（博興県博物館、興国寺石造像）、東営市博物館、青州（青州市博物館、逢山県勝福寺址）、臨ク県博物館、安丘（安丘市博物館・董家荘漢墓）、諸城市博物館。この調査において、本研究のテーマに沿う、以下の各項目において成果を得た。

①北魏～唐の「奉為」造像

山西省博物院、博興県博物館、東営市博物館、青州市博物館、臨ク県博物館、安丘市博物館、諸城市博物館では、近年発掘された石造遺物中に、「奉為」造像の実例を多数調査し得た。

②舎利塔・舎利荘厳

定州市博物館では、静志寺地宮出土遺物を多数調査した。修徳寺塔、開元寺塔（定州）・浄衆院・静志寺地宮、天寧寺木塔、龍蔵寺塔、開元寺塔（正定）、勝福寺塔において、隋～北宋の舎利塔建立地の現地踏査をおこなった。隋の舎利塔碑として、龍蔵寺碑（正定龍興寺）、龍華碑（博興県博物館）の二件を調査した。

（２）日本国内の調査

近世肖像彫刻についての調査を開始し、古代的「奉為」造像の近世的変容について見通しを得た。調査物件は以下の通り。徳川家康像（東京・芝東照宮）、徳川家康像（京都・南禅寺）、豊臣秀吉像・高台院像（京都・高台寺）、伊達政宗像（宮城・瑞巌寺）

2008 年度
（１）海外調査
2008 年 9 月に九日間、中国甘粛省において、以下の調査地を調査した。
〔甘粛省〕敦煌莫高窟、敦煌博物館、西千仏洞、楡林窟、文殊山石窟、馬蹄寺石窟、金塔寺石窟、甘粛省博物館。この調査において、本研究のテーマに沿う、以下の項目において成果を得た。
①北涼～唐の「奉為」造像
上記の調査地における、石窟・単独造像・造像碑を調査し、銘文の読解と表現の分析をおこなった。その結果、「奉為」造像の実例を多数調査し得た。中でも、敦煌博物館において北涼の八角石塔を実見し得たことは、中国思想と仏教の習合状況を考える上での、きわめて重要な材料となった。
（２）日本国内の調査
立石寺（山形）、円福寺（白鷹町）、新庄（戸沢家墓所）、郡山（如法寺）、二本松（龍泉寺）、二本松（二本松市歴史資料館、畑田地区）、揖斐郡揖斐川町（華厳寺）、津市白山町（河口頓宮跡）、伊勢市（伊勢神宮）。
東北地方の調査地では、特に経塚と立地の関係について知見を得、「奉為」行為としての埋経という問題に貴重な展望を得た。また、中部地方での調査では、聖武天皇の関東行幸を「奉為」行為の観点から捉える重要な知見を得た。

2009 年度
（１）海外調査
2009 年 8 月に 9 日間、中国浙江省において、以下の調査地を調査した。
〔浙江省〕霊隠寺、飛来峰石仏、雷峰塔、浙江省博物館、慈雲嶺資延寺、烟霞洞、六和塔、通玄観、上天竺寺、下天竺寺（以上、杭州）、柯岩弥勒仏、会稽山寺、ウ廟、ウ陵、蘭亭（以上、紹興）。阿育王寺、延慶寺、天一閣（以上、寧波）、紫竹林、潮音洞、普済寺（以上、普陀山）、巾子山、開元寺跡、妙善寺跡（浄慈寺）、台州（臨海）博物館、台州黄岩霊石寺塔、黄岩博物館（以上、台州）。上記の調査地における、石窟、単独造像、造像碑、舎利塔ならびに舎利容器の調査をおこない、表現ならびに所在地の意味について分析を加えた。ウ廟に隣接する大ウ寺は、仁寿舎利塔起塔地のひとつである会稽山寺である。同地の現地調査によって、本研究ですでに確認してきた仁寿舎利塔起塔地の景観と同様の条件を備えていることが確かめられ、景観分析の貴重な素材を得ることができた。また、普陀山では、観音霊場が備えるべき景観上の条件と絵画作例と景観との関係について貴重な成果を得た。
（２）日本国内の調査
東北地方では、米沢市、いわき市、会津の各地を現地調査し、仏像の所在地と景観の関係に分析を加えた。また、長谷寺・壷阪寺・子島寺・粉河寺での調査により、特に霊験観音の所在地の意味を考察した。長谷観音は「奉為の造像」の文脈を踏まえることで、霊験像としての意味を的確に把握することができる。したがって、「奉為の造像」は長谷観音のように、祈りを捧げられるべき場を得ることでその意味を完結するのである。
（３）報告書の刊行
四年の調査研究を踏まえた論文三篇を収載した研究成果報告書を刊行した。
第一章「「奉為の造像」論―主体・祈願・表現」（長岡龍作）は、中国北魏の雲崗石窟を中心に扱いながら、東アジアにわたる「奉為の造像」の基本的な原理を考えた。誰が誰のためにという関係をテーマとして造像を捉え、誰がという面では、北魏に盛行した「邑義」という信徒団体の自己イメージを問い、誰のためにという面では皇帝のためという動機の内実を問い直した。そして、そのような意識がどのような表現へと結びついたのかを確認した。
第二章「興福寺講堂不空羂索観音菩薩像の造立と南円堂移座―先考先妣の為の造像と像のその後―」（原 浩史・研究協力者）は、日本の奈良時代の興福寺講堂不空羂索観音像をとりあげた。藤原氏が亡き親の為に造像した本像は、その後南円堂に移され、篤い信仰を集めるに至る。今は失われてしまった本像の造像事情を周到な史料読解によって辿り、誰が誰のためにどういう願意で造ったのかをあきらかにした。また、従来議論の的となっていた南円堂への移座問題について新知見を提示した。
第三章「天皇の仏画―『門葉記』にみる三壇御修法をめぐる造像」（泉 武夫）は、平安中期には成立していた玉体護持のための三壇御修法（如意輪観音法・普賢延命法・不動法）の本尊画像について、その仕様と像容、絵師や阿闍梨の関わり方を『門葉記』を読み解くことからあきらかにした。王の為の修法の本尊は、王の為の造像にほかならならない。画像の像容は、天皇への憚りを意識したものだったことを指摘し、「誰のため」が表現を確かに左右していたことを示した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１１件）
1.泉武夫、特異な星辰神の図像とその象徴性、仏教芸術、309 号、査読有、2010 年、13-39 頁
2.長岡龍作、仏教における『霊験』―仏が感応する場と表象、死生学研究、12 号、査読無、2009 年、266（最初頁）-230（最後頁）
3.長岡龍作、高清水善光寺阿弥陀如来像と中世の生身観、仏教芸術、307 号、査読有、2009 年、51～69 頁
4.長岡龍作、古代日本の「生身」観と造像、美術史学、29 号、査読無、2009 年、35～60 頁
5.泉武夫、北野天満宮蔵「舞楽図」衝立について-古代末期～中世初期の楽舞の状況から-、美術史学、29 号、査読無、2009 年、1～33 頁
6.長岡龍作、救済と表象―「中尊寺供養願文」寺院に投影された意味について、季刊東北学、16 号、査読無、2008 年、66～83 頁
7.長岡龍作、彼岸・因果・表象―仏教美術への開かれたアプローチとして、日本仏教綜合研究、6、査読有、2008 年、31-52 頁
8.泉武夫、仏教美術研究の近年の動向と隣接諸学との接点、日本宗教文化史、21 号、査読有、2007 年、48～56 頁
9.長岡龍作、「山の像―古代日本の山岳観と神仏」、東北文化研究室紀要、第 47 集別冊、査読無、2006 年、53-67 頁
10.長岡龍作、悔過と仏像、鹿園雑集（奈良国立博物館研究紀要）、第 8 号、査読無、2006 年、1-29 頁
11.長岡龍作、楽法寺蔵観音菩薩立像、妙法寺蔵伝阿弥陀如来坐像・伝観音菩薩立像・伝虚空蔵菩薩立像、國華、1326 号、査読有、2006 年、38-43 頁

〔学会発表〕（計７件）
1.長岡龍作、仏像と風景―仏への祈りの場とは何か、京都嵯峨藝術大学特別公開講座、2010 年 1 月 16 日、京都嵯峨藝術大学
2.長岡龍作、山水と表象―その宗教的機能を中心に、美学会例会、2009 年 7 月 11 日、成城大学
3.長岡龍作、隋仁寿舎利塔と青州勝福寺址、国際シンポジウム「中国北朝後期から隋唐期の山東仏教石刻と東アジア」、2009 年 5 月 16 日、明治大学
4.長岡龍作、美術から見た平泉の信仰―「表象」の仏教的意味を中心に、シンポジウム「都市平泉と列島の中世」、2008 年 7 月 26 日、平泉ホテル武蔵坊
5.長岡龍作、仏教における「霊験」―仏が感応する場と表象、シンポジウム「礼拝像と奇跡　東西比較の試み」、2008 年 5 月 31 日、東京大学
6.長岡龍作、彼岸・因果・表象―仏教美術への開かれたアプローチとして、日本仏教綜合研究学会、2007 年 12 月 9 日、山形大学
7.長岡龍作、彼岸と表象―仏教美術の機能についての基礎的考察、美術史学会全国大会招待発表、2007 年 5 月 25 日、九州大学

〔図書〕（計７件）
1.長岡龍作、科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書「奉為の造像」研究（共著）、査読無、2010 年、4-27 頁
2.泉武夫、科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書「奉為の造像」研究（共著）、査読無、2010 年、48-64 頁
3.長岡龍作、東北人の自画像（共著）、東北大学出版会、査読有、2010 年、1-39 頁
4.長岡龍作、日本の仏像―飛鳥・白鳳・天平の祈りと美、中央公論新社（中公新書）、査読無、2009 年、1-274 頁
5.長岡龍作、平泉―みちのくの浄土（共著）、査読無、2008 年、NHK仙台放送局他、134-137 頁
6.泉武夫、国宝六道絵、査読無、中央公論美術出版、2007 年、1～376 頁
7.長岡龍作、東北―その歴史と文化を探る（共著）、東北大学出版会、査読無、2006 年、79-126 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
長岡　龍作（NAGAOKA RYUSAKU）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：70189108

(2)研究分担者
泉 武夫（IZUMI TAKEO）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：40168274

井上 大樹（INOUE TAIKI）（平成 19～20 年度）
東北大学・大学院文学研究科・助教
研究者番号：80422070

(3)連携研究者
なし